

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 6 月 15 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	佐藤 悠

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、京都
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ゲノム実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 5 月 29 日 ~ 平成 26 年 6 月 5 日 (8 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学理学研究科 阿形清和氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の実習では屋久島実習で採取したサルやシカの糞サンプル中の餌植物種を糞中 DNA の次世代シーケンサーを用いた解析により同定することを目的とした。直接観察および乾燥させた糞の内容物調査では、植物が分解されていたこともあり数種類しか同定できなかったのに対し、DNA 解析を行うと 40 種以上の植物を同定することができた。各植物の採食量を明らかにすることはできないものの、餌の種同定に関しては次世代シーケンサーを利用した遺伝子解析は非常に有効であることが実感できた。

写真. 次世代シーケンサー
一方で講師陣の手際の悪さや浅慮が目立った。複数グループに分かれて実験や解析を行ったが、ほとんどの講師が1つのグループにかかりきりとなり、ほかの数グループはほとんど放置状態でデータの解析をしなければならず、気軽な質問や、どういったデータをどのように扱えばいいかなどの指導を受けられない状況であった。またデータの解析に関しても、いきなりプリントを渡され、プログラミングを行えと言われても土台無理な話であり、事前にちゃんとした講義と基礎からの練習をさせるべきであった。責任者に対して、同様の意見が一部の講師からも出ていた。人手が足りないことは重々承知しているが、講師の割り振りのバランスなど見直すべき点は非常に多いと思う。
またコースの配属は屋久島実習の際に希望をとる形で決められていたが、屋久島実習に参加していながら自分の第一希望になれず、それでいて屋久島実習に参加していない学生が屋久島参加者の第一希望のグループに配属されているなど腑に落ちない割り振りが見受けられた。屋久島実習の延長であるのだから、屋久島実習の参加者を優先し、後者のような学生は参加者が定員に達していないグループに配属するのが普通だと思う。
今回の実習は拘束時間が長い割にそう大した指導を受けられた訳でもなく、意義のある実習とは言い難かった。それでも次世代シーケンサーの有効さを確認することはできた。人手が足りなかったとはいえ、講師陣には大いに反省をしていただきたい。
6. その他 (特記事項など)